



ふじあざみ

発行
国土交通省中部地方整備局
富士砂防事務所
富士宮市三園平1100
電話0544(27)5221
<http://www.cbr.mlit.go.jp/fujisabo/>



写真提供：鈴木治男 氏

けん か い ち ら く の う ち た い あ さ ぎ り こ う げ ん

県下一つの酪農地帯朝霧高原

富士山西麓の海抜600m～900mの高原地帯は、朝に霧が多く発生することから朝霧高原と呼ばれ、県下一つの酪農地帯として良く知られています。

(朝霧高原の気候)

南西から流れ込む湿度の高い気流により年平均3000mmの降雨量があります。又梅雨の頃から初冬まで湿度90%以上の湿った空気におおわれています。気温は市街地より平均4度位低く、特に7月～8月は5度～6度も低くとても涼しい地帯です。

(朝霧高原の地質)

地質は古富士泥流を基盤とし、その上を新富士火山の溶岩におおわれた全く水に恵まれない地域です。

西富士一帯の土地表面は、黒ボクと呼ばれる“黒色火山灰土”が広がっています。黒ボクの下はマサ土と呼ばれる“褐色火山

灰土”が層をなし、その下は火山砂礫の入り混じったスコリアの層、そして火山礫・溶岩となっています。

西富土地域の地質

黒ボク	0m
マサ土	0.3m～0.5m
スコリア	0.6～1.0m
火山礫	0.9～1.5m
溶岩	1.2～2.0m

(県下一つの酪農地帯へ)

ここはかつて源頼朝が“富士の巻狩り”(1193年)をしたことで有名なところです。

昭和12年から終戦までは、旧陸軍少年戦車兵学校の演習地として使われていました。戦後昭和21年緊急開拓事業が始まり、この地が国営開拓地になり、地元農家・長野県下伊那郡から、満州からの引揚者など計

360戸の人植がありました。

昭和21年～24年は人植のための開拓期、昭和25年は米・麦・野菜等農業を畜産に転換することに努め、昭和29年、「集約酪農指定地域」に指定され、一気に西富士酪農の基盤が確立されました。当初135戸あった酪農家は、現在は55戸に減っていますが、1000ヘクタールの草地に、成牛4,500頭、年間32,000トンもの牛乳を生産し、県下一つの酪農地帯を作っています。

朝霧高原の涼しい気候は、牧草の生育と、体温の高い牛(38～40°C)の体に適しております。さらに多く降る雨は牧草の生育を促します。又朝霧高原の地形は標高600m～900mへと徐々に高くなっており、南向きで日当りがよく、牧草地の水はけも良いという、酪農に適したものとなっています。家畜から排出される糞尿は草地に完全に還元する「土→草→牛」の循環型の草地酪農として経営されています。

参考資料「西富士開拓と酪農のうつりかわり」

富士山西麓の県下の酪農地帯は、60年前、昭和21年、長野県下伊那郡大下條村（現阿南町）からやってきた人々が作り上げたものです。

長野県下伊那郡大下條村（現阿南町）は全国屈指の山間地であり農家の耕地面積は平均0.5ヘクタールで、零細のため多く人を満州開拓に送っていました。

昭和20年、終戦により復員軍人、満州からの引揚者など多くの人々が村に帰ってきました。村にとって、これらの人々をどうするかが大きな課題でした。

この年、政府が戦争引き上げ者の就業対策と食糧増産目標とした「緊急開拓政策」を発表、この一環として富士西麓の開拓が開始されました。

大下條村は早く開拓計画を村の事業として進めることを決め、愛知県や静岡県などの候補地を見て回り、ついに西富士地域を大下條村の“分村的開拓地”として決め、人植者を募りました。

<西富士への人植>

昭和21年1月に第1陣73名が、2月に第2陣57名の計130人が西富士の開拓に希望と期待を込めてやってきました。年令は15才～26才の若者達で、農家の2～3男でした。開拓団は団名を「西富士長野開拓団」と命名し、共同生活を始めました。

人植した所は海拔600m～900mに至る高地で、地元では不毛地帯といわれ、見向きもされない地域でした。（図1の広見、荻平、富士丘）

不毛の高冷地で鍬をふるい広い原野を畑に変えるという、とてもつらい労働の日々でした。しかし若者達は自分達の土地が持てるという希望に燃えてがんばりました。

ろくに食べるものもなく、飲み水は雨水。そんな中で開拓は続けられましたが、あまりの過酷さにやめて帰ってしまう人もいました。作物はさつまいも、じゃがいも、大根、とうもろこしなどを作りましたが、もともと火山灰土で高冷地の為思うように作物が育ちません。母村（大下條村）から食料の援助や物資の応援をうけ、何んとか開拓を続けました。



開拓作業（昭和22年） 「富士開拓三十年史」より

人植後半年、西富士長野開拓団の団長が伊藤義実氏に決まり、伊藤団長のもとに団結を強めてゆきました。

開拓団での共同生活は、自給自足であり

開拓団の中に“製塩部”“製炭部”“輸送部”などを作り、開墾以外の仕事もやりました。例えば、製塩部は富士市元吉原の海岸で塩作りをし、製炭部は現金収入を得るために富士山麓の山に入り炭作りをし、輸送部はトラックを購入し、物資の運搬やバス代わりもしました。

<村の建設>

昭和23年になると、いよいよ広見、荻平、富士丘という村の建設が始まりました。今までの共同生活から一人一人による個人経営の始まりです。住む家は、戦争当時、兵隊が使っていた建物を壊して出てきた柱や板などを使っての“ほっ立て小屋”でした。家は雨もりがし、冬はすきま風で寒く、つらい毎日でした。特に困ったことは、水がなく、雨水をためて使わなければなりませんでした。しかし自分の家ができることは大きな喜びでした。この頃は、陸稻、さつまいもや、



23年ごろの個人住宅（見返） 「富士開拓三十年史」より

大根、キャベツなどの高冷地野菜などを多く作っていました。

水道は昭和24年着工、根原から水を引き、33年には完了。電気は32年迄全部の地区に電灯がともされました。道路は開拓幹線が51年に着工、57年に開通しました。これが現在の富士宮・鳴沢線です。このように村作りは確実に進められていきました。

<酪農の本格化>

昭和29年、西富士地域は「高度集約酪農地域」の指定を受けました。国から西富士地域は酪農に適した地域だと認められ、いろいろな補助をうけられるようになったのです。昭和30年国の補助でオーストラリア産のジャージー種乳牛約260頭が導入され、以後酪農一本で行くとの方針を決めました。ついに西富士での長野開拓団による酪農経営が本格的なものとなりました。

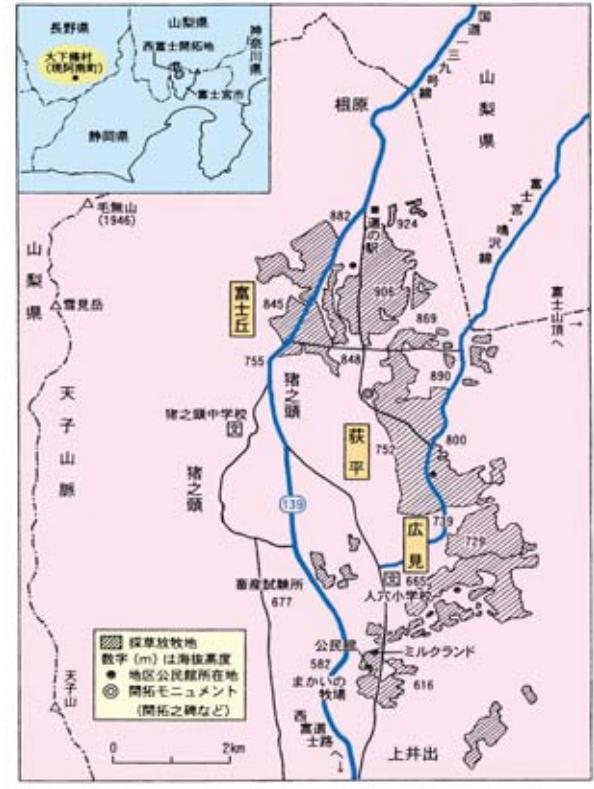


図1 長野県開拓団の入植地（朝霧高原） 「富士山世界遺産への道」より

<富士マサとの闘い>

今や牧草地も約1,000ヘクタールにも広がっていますが、大規模な草地の拡大には富士山麓特有の土壤との闘いを強いられました。「富士マサ」「マサ土」と呼ばれる黒ボクの下の層で、緻密で透水性は少ないため、草木の根を通さず保水性が乏しく、表土の侵食が甚だしいという悪質土壤と向き合うことになったのです。

しかし、表面の黒ボクとその下のマサ土はうまく混ざり合うと牧草がよく育つ土になる事がわかりました。そのため、ブルドーザーに特殊アタッチメントをつけて深く掘り、表面の黒ボクと呼ばれる火山灰土と、数十センチ下のマサ土を混ぜ合わせ（「マサ抜き」と呼ぶ）その後を整地してゆくという大きな草地造成事業が行われました。

さらに、草地として牧草をまくまでに、クマザサの根や芽を三本鍬で耕し、ふるつて除去し、リン酸分の少ない土壤に石灰を入れ、土壤改良をしていきました。そのような努力と苦労の末、現在の朝霧高原の広大な牧草地が出来上がってきたのです。



草地造成事業 「富士開拓三十年史」より

富士山に 暑さす 豚の放牧

富士朝霧高原は、1000haもの広大な牧草地をかかえています。この大自然の中で安全でおいしい豚肉を提供したいという思いから、10年前地元酪農専門農協である富士開拓農協が音頭をとり、豚の放牧が始まったもので、全国でもまだ珍しい飼育方法です。

放牧豚は、富士のすそ野の広大な原野の中で完全放牧により育てられます。草を食べ、土を食べ、ドロンコ遊びをし、野外で寝込み、一般豚の80倍以上の飼育面積（一頭当たり20坪以上）で自由に



放牧風景

駆け巡り、一般豚の100倍の運動量を示しています。

体重30kgで放牧され、出荷時の110kgまで育つのに3ヶ月以上、富士山をバックにストレスフリーの環境でのびのびと飼育されます。（一般豚は2ヶ月で110kgに育ちます。）

与える飼料は、非遺伝子組み変え、抗性物質不使用のものが使われ、安全・安心に徹底的にこだわって飼育されています。

さらに排出する糞尿は放牧場での自然還元であり、肥料となり草

となりエサとなります。放牧は真冬でも行なわれて、富士山をバックに雪の中を走り回る豚のめずらしい姿を見ることができます。



飼料タンク

現在の放牧場は10牧区あり、約300頭余りの豚を放牧し、年間700頭の出荷をしています。その肉質はトップクラスの評価を受けています。

朝霧高原の広大な原野は酪農と同様、豚の放牧にも適し、地域の人々の生活に大きな恵みとなっています。

富士山に 寄せる思い

今年も8月5日(日) 富士山登山
駅伝が行われました。

富士山登山駅伝競走は、毎年8月に行われます。御殿場市陸上競技場から富士山頂の浅間神社までを各チーム6人が往復して時間を競うレース。11区間、46.37km。



上りコース

標高差3199m、気温差約15℃の大変過酷な条件の中、体力の限界を超えて各チームが挑みます。今回は、32回を数える駅伝競走の中で16回の優勝、昨年迄8連覇していた滝ヶ原自衛隊チームの監督、太田康幸氏に駅伝競走について語っていただきました。

「駅伝競走に対するトレーニングは、自衛隊の通常の訓練とは別に、早朝や勤務終了後に行います。休日に自主的に行う者もいます。1ヶ月前からは、高所に体を

慣らすために8合目の山小屋で合宿訓練も行います。又山頂へのコースは空気がうすくなつてゆく所を走るために、自分との闘いに勝てる様精神面のトレーニング、砂地を疲れずに上る走法のトレーニング等を行って大会にそなえています。

富士山の魅力は、何といっても自然の雄大さです。8合目で見た、日没の時に雲海に映る「影富士」、下界に広がる大パノラマ、その美しさに圧倒されてしまいます。

駅伝競走での強い思いは、日本で一番高い山、きびしい条件下の



下りコース

中、一番最初に登り、一番最初に降りてくるという自衛隊員の並はずれた体力を国民にアピールしてゆきたいことです。今年は優勝を逃しましたが、来年は絶対優勝します。」と、力強い言葉で締めていただきました。



プロフィール

- ★太田康幸氏
- ★昭和41年兵庫県生れ
- ★普通科教導連隊第4中隊

災害 体験談

昭和54年の土石流災害により潤井川が氾らん!!

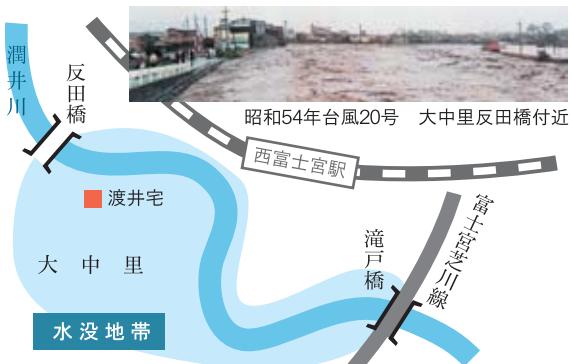


渡井正二 氏

昭和54年10月台風20号により、大沢崩れに端を発する土石流が発生、富士宮市の潤井川が増水し、下流域に大きな被害を与えました。その当時の体験を大中里在住の渡井正二さん（現在75才）にお聞きしました。

「潤井川が増水しているとの事で、午後家にもどると、増水した水が堤防を乗りこえて、田畠・道路へと流れ出し、すでに20~30cmぐらい水没していました。家中へは水は入っていませんでしたが、みるみるうちに水が流れ込み、何か目まいがする様な感覚に陥りました。あっという間に水かさを増し、たたみが浮き上がってきたのです。床から1mぐらいの高さまで達してしまいました。大切にしていた本や貴重な資料等が水びたしになり大半はすることになりました。

大あわてで、家族ともども近くの高台にある親類の家にひなんしました。私の家の下流「滝戸橋」で増水した水が逆流し、この付近一帯が床上まで浸水し、大きな被害をうけました。自分の体がまたたく間に腰上迄水に浸ってしまう恐怖は今でもぞっとしています。」



お知らせ

夏休み富士山大沢扇状地自然観察会

8月22日（水）に、「夏休み 富士山大沢扇状地自然観察会」が開催され、親子連れなど6組18名が参加しました。この観察会では、大沢扇状地の「岩壠」をスタートし、砂防施設のある大沢扇状地内を約5kmに渡ってウォーキングをしながら観察。職員の案内により、クイズを行いながらの砂防施設見学や、建設機械の試乗体験を通して砂防事業への関心と理解を深めていただき、施設の一部である樹林帯においては、森林教室を開催し、楽しみながら体験を通じて富士山の自然環境についても知識を深めていただきました。

ゴールでは、クイズの正解数に合わせて、星型シールを貼った記念シートをプレゼント。観察会終了後のアンケートでも、「砂防事業が良く解った。」「また、参加したい。」「大沢扇状地を、実際に見たり歩いたりすることで、砂防事業をより身近に感じることができた。」などの感想をいただきました。



観察会に参加された皆さん



樹林帯での森林教室

富士山総合学習及び現地見学会等結果報告（7月1日～9月30日）

案内日	内容	見学者	合計
7月5日(木)	由比地すべり対策見学	静岡県中央地域防災局	9
7月13日(金)	扇状地見学	焼津市下水道課	2
7月17日(火)	扇状地等見学	JICA	11
7月18日(水)	扇状地見学	富士市農業委員会	35
7月19日(木)	扇状地見学	阿幸地区高齢者	43
8月1日(水)	大沢崩れ見学	静岡県立富士高等学校1年生	46
8月2日(木)	扇状地見学	富士河口湖町自然観察教室 山梨県内小学生	61
8月3日(金)	概要説明と扇状地見学	(社) 捐斐建設業協会	17
8月6日(月)	概要説明と扇状地見学	国工館大学4年生	23
8月7日(火)	大沢崩れ見学	由比町	8
8月9日(木)	大沢崩れ見学	科学技術者育成セミナー 静岡県内高校生	32
8月22日(水)	扇状地自然観察会	一般応募による参加者	19
8月22日(水)	概要説明（大沢崩れ）	富士山習習	4
8月23日(木)	出前講師（GIS関係）	中学・高校教師 一般	20
8月26日(日)	バネル展示	一般参加	62
8月30日(木)	扇状地見学	焼津市下水道課	25
9月10日(月) ～ 9月14日(金)	キャンプ砂防 2007in富士山	大学生	4
9月12日(水)	概要説明	御殿場養護学校 高等部1年生	27
9月13日(木)	大沢崩れ見学	富士常葉大学	18
9月13日(木)	概要説明と扇状地見学	日本大学文理学部	12
9月19日(水)	概要説明と扇状地見学	吉永北地区連合町内会	25
9月21日(金)	出前講師	大富士中学校1年生	163
9月25日(火)	概要説明と扇状地見学	上野小学校保護者	20
9月28日(金)	出前講師（アドバイザー）	大富士中学校2年生	31

「富士砂防事務所インフォメーション」
～FMラジオにて情報発信中～
Radio-f 84.4FM Radio-f(ラジオ-エフ)



～富士山の基礎知識、富士砂防事務所が開催するイベント情報、防災情報等～
コミュニティFM「Radio-f」(84.4MHz) 毎週水曜日 17:40頃から5分間
「富士山について、こんな話を聞きたい」といったリクエストやお便りを募集しています。
宛先など詳しい情報はラジオホームページ(www.radio-f.jp)より、「富士砂防事務所インフォメーション」係までお願いします。

ご意見・ご感想・ご質問など、お気軽に寄せください。

富士山に関する古い写真・資料等をお持ちの方、また災害体験をされた方の情報の提供をお願いいたします。

■国土交通省 富士砂防事務所

〒418-0004 静岡県富士宮市三園平1100
担当／総務課長・小川、または調査課長・石原まで

TEL.0544-27-5221

「ふじあざみ」に掲載している内容・データ等は、現時点までに得ている調査結果を基にしています。
今後の調査等の進展により、内容の一部または全部に変更が生じる場合もあります。

キャンプ砂防 in 富士山2007

9月10日（月）から14日（金）までの1週間、「活火山富士山と砂防」をテーマに富士山における砂防事業の意義・役割について学ぶ「キャンプ砂防 in 富士山2007」を実施しました。

全国から砂防を専攻する4名の大学生が参加し、大沢扇状地、大沢崩れ、由比地すべりの砂防施設や工事現場を見学するなど、様々な体験をとおし富士山における防災対策のあり方を学び、砂防事業の役割と意義についての学習をしました。



大沢崩にて

環富士山火山防災シンポジウム

環富士山火山防災連絡会、国土交通省富士砂防事務所が主催「環富士山火山防災シンポジウム」を開催いたします。このシンポジウムでは、宝永噴火から300年を迎える今、噴火前に常日頃から行なっておくべき対策、噴火の兆候が認められた時の住民の心構えや行政に求められている対応などについて討論を行い、住民と行政による富士山火山防災の取り組みをさらに強く進めてゆくものです。

■ テーマ

宝永噴火から300年どう備える、富士山噴火

■シンポジウム

（会場：富士宮市民文化会館）

平成19年11月25日（日）

○午前：火山防災に関する国際ワークショップ

（参加費無料 先着200名）

○午後：シンポジウム

・基調講演

・パネルディスカッション

・中高生による研究発表 等

（参加費無料 先着1200名）

■現地見学会

平成19年11月26日（月）

○富士山の“いま”を知る、見学会

見学地：大沢扇状地、水ヶ塚駐車場より宝永火口を観察

（参加費が必要です 先着90名）

※詳しくは、富士砂防事務所のホームページ、もしくはチラシをごらん下さい。チラシは静岡県、山梨県、沼津市、三島市、富士宮市、富士市、御殿場市、裾野市、長泉町、小山町、芝川町、富士吉田市、富士河口湖町、西桂町、山中湖村、忍野村、鳴沢村、身延町の公共施設、などにおいてあります。



Circum-Mt.Fuji Symposium on Prevention of Volcanic Eruptions

主催：富士山火山防災連絡会、国土交通省富士砂防事務所 貸切シンポジウム

お問い合わせ先：富士山火山防災連絡会、国土交通省富士砂防事務所 0544-27-5387

私が担当しています

由比出張所 事務係長



寺田 広和

今回、大沢扇状地自然観察会の企画・運営を担当させていただきました。これからも、当事務所が取り組んでいる事業を身近に感じていただけるような場を色々な形で提供していきたいと思っております。

普段は、平成19年4月に新たに設置された由比出張所にありますので、そちらにも気軽に立ち寄り下さい。

※本誌は再生紙と環境にやさしいインクを使用しています。